第五十三回中央教化研究会議

パネルディスカッション

司会　これより、中條先生と井出先生の両先生に加え、現地の調査にご協力いただきました、広島県光善寺ご住職の田野岡亨悦上人、山梨県善行寺ご住職の山本是温上人をお招きいたしまして、パネルディスカッションを行います。司会進行は、現宗研嘱託の灘上智生上人です。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

灘上　灘上でございます。只今より、ディスカッションを始めたいと思います。

はじめに、自己紹介を兼ね、田野岡上人より地元の現状をお話しいただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

田野岡　はい、よろしくお願いいたします。二〇一八年に、現宗研ならびに中條先生に過疎調査として広島県北部へおいでいただきました。そのときの檀信徒の色々なご意見が、大変に心強いものであったと記憶しております。ただし、調査にご協力いただいたのは、高齢者が主でございましたので、実際にその下の世代が同じように思ってくれるかどうかについては、少し心配がございます。中條先生の基調報告から重なる部分もあるかと思いますが、人口的には、現在、さらに減少しておりまして、三次市の人口が五万一四〇〇人、世帯数が二万三五〇〇。庄原市の人口が三

万四四〇〇人、世帯数が一万五四三五という状態です。全ての人口を合わせると、広島県の県北は九万人以上で、世帯数も約四万だと思います。広島県の北部寺院は一一ヶ寺あり、調査対象地域外にも二ヶ寺ほどありますので、全部で一三ヶ寺ございます。この一三ヶ寺の合計の檀家数を想像しますと、約五〇〇軒程度と思っております。現在、三次市内にも若者向けのアパートが増えてきておりますので、人口は案外減ってはいないのではないかとお思いの方もいるかもしれません。ですが、いわゆる檀家さんの場合、高齢者が亡くなると、檀家さんに息子さんがいても、もう遠いところに住んでいるということで地元にはいらっしゃらないということがあります。つまり人口減以上に、檀家数が減っていくというような状況にあるのではないかと思っております。

私は一九七七年に、二六歳で法音寺の住職になりました。そのときの三次市の人口が三万七〇〇〇人、二〇〇四年に平成の大合併がありましたので、六万一〇〇〇人に増えました。現在では、先ほど申し上げましたように、五万一〇〇〇人少々まで減少し、予測によりますと、二〇四〇年、今から二〇年後の人口は四万人を下回ると予測されております。ただし、今申し上げましたように、若者が補充されているのであって、ご高齢の檀家の方が亡くなっていくと、檀家数は徐々に減っていってしまうという状況であると思います。ちなみに、私が住職になりました一九七七年のときの法音寺の檀家数は、市内に三〇、市外に六、これはある程度お付き合いがある檀家さんです。しかし現在では、市内が一五、市外が八といった状況になっております。先ほど、今から二〇年後の話を持ち出したのは、この市内の一五の檀家さんの中で、男性で地元に就職している人の軒数を考えますと、二〇四〇年には、市内の檀家さんは六、市外に至っては、果たしてつき合ってくれているかは分からないという状況になっていくかと思います。先ほど申しました一三ヶ寺については、現在、四人の住職と四人のうち一人の奥さんが、教師資格を持っておりますので、合わせて五人の僧侶がおります。それで二〇年後には、先ほど申し上げた五〇〇ほどの檀家数が約半分になるのではないか。そうなりますと、生活していける住職の数は、二名もしくは一名ということになってくるかと思います。仮

に住職が一名ということになりますと、合併または廃寺などを行わない限りは、残りの一二ヶ寺は全部代務寺ということになりますので、行政に対して、手続きの簡略化などをお願いしなければ、二〇年後の広島の県北寺院はどうにもならないと思います。

もう一つ、報告になかった点ですが、仮に寺院を合併して、その代務寺院が壊れていったときに、危険でない場所ならそのまま倒壊に任せればいいと思いますが、危険であれば撤去、それから整地をしなければならないと思います。その費用は、どなたが負担するのかといった問題が、非常に大きな問題となっております。普段、私が回っているところ、今回のお盆で回った場所をGoogleマップで調べましたら、面積が約三〇〇〇平方キロメートルという広さで、東京都の約一・五倍の広さになります。歳を重ねるにつれ、次第に回れなくなっていくので、代務住職がいるのかなと考えることもございます。先ほどの報告にも出ておりましたが、そのような点も、大変心配をしております。

長々申し上げました。以上でございます。

灘上　ありがとうございます。将来、徐々に檀家が減ってくるということで、代務の負担、それから、経済的な問題がより深刻になるということもあると思います。また宗門に対しては、行政上の手続きの軽減、簡略化をご要望ということです。

続きまして、山本上人よりお話をお願い申し上げます。

山本　はい。早川町にある寺院のうち五ヶ寺を代務住職しております、山本是温と申します。現在、住職をしているところは、早川町代務住職の寺院から三十分ないし一時間ぐらいで行ける場所でございます。代務している五ヶ寺を合わせて、檀家数が約一一〇軒前後あるでしょうか。中條先生にしっかり調査していただいたように、もう五十年ぐ

らい前から過疎は進んでおりますが、檀家数はほとんど減っておりません。というのは、実情、甲府やその近辺に皆さん移転・移住しておりますが、完全にお墓を移したという檀家は数件ありますけれども、ほとんど霊園墓地式を取っていただきまして、いわゆる、私のところから離れていないという現状です。五ヶ寺のうち三ヶ寺は、いわゆる護持会費制度を取っておりませんでしたので、お寺に関する思いというのはあまりない、そういう状況でございました。残りの二ヶ寺については、私の祖父の時代から関与していたところでありますので、護持会費をいただいて、お寺の経営を行っているということもあり、お寺に関する意識も高く、一ヶ寺については二年前に屋根替えを行い、きれいになっております。

今後についても、祖父の時代からずっと親しくしている檀家さんばかりでございますので、たとえ遠くへ離れていても、「お上人さん頼みますよ」という関係ですので、法華経から離れることはないと思います。お墓が霊園などに移っても、「じゃ、どうしたらいいですか」と相談に来られますので、「霊園を取って、じゃあ私が行きましょうか。近くのお寺さんに頼みましょうか」というような指導もしております。今後、どのような変化が起こるか分かりませんが、これからは、とにかく現状の中で一生懸命法務を行いながら、精一杯檀信徒と共にお寺を守っていくという状況です。

中條先生の資料にも書いてありますように、地域によって異なった多様性があり、一律的手法では問題に対応できない。確かに、そういうことであろうかと思います。早川町の現状、他のお寺も同様であると思います。

特に早川町では、祖父の時代から私まで法灯を継承しているお寺は、あと一つあるか程度ですので、ずっと前からよく知っている住職が来てくれるので安心して下さっているという状況が続いています。私の息子も、僧侶になってくれておりますので、そこまでは大丈夫かなと思っております。以上でございます。

灘上　ありがとうございます。現状を大切に、ご子息も僧侶をお継ぎになり、ご活躍でいらっしゃいます。

本日、中條先生に広島県と山梨県のお話をいただきましたが、地域によって過疎の形が異なるということでした。先生はご講演の中で、両者の比較により寺院の行方を類推することができるのではないかと仰いました。寺院の行方について、もう少し具体的にどのような形になっていくのか、お話しいただければと思います。

中條　はい、ありがとうございます。地域の比較によって類推が可能であるということについては、さきほども述べた通りです。

宗務院による事例調査から、ある程度過疎地の将来は類推できるのではないかということです。宗務院が三地点の調査を行った中で、早川町と備北地域は現宗研の所管で、能登地域については伝道部の所管でそれぞれ調査を行いました。これら三地点を比較した際に、過疎が将来的にどうなるのか。過疎寺院の近い将来、今後二〇年ぐらい先には、早川町のあり方が近いのではないかと思います。これからなだれ打つのかどうか分かりませんけれども、現在の能登はこれから過疎が進んでいくであろうと推測されます。能登の次に広島があり、さらにその先に早川が出てくるだろうと思われます。能登が早川のとおりになるのか、あるいは備北地域のようになるのかということは、別の議論ですので置いておきますが、よく似た状況が生まれてくるのではないかと類推、推測されるということです。わずか三つの事例しかないではないかというご意見もあるかもしれませんが、このように三地点を比較することによって、過疎の時間差というものを類推していく、推測していくことで明らかになるのではないかということを、レジュメの締めの部分で申し上げているということになります。

各地域の過疎のあり方、人口減少のあり方というのは、年少人口減少型、つまり少子型過疎です。これが、現在過疎地域で普遍的に見られる事象ですが、現時点で早川町は二歩も三歩も先を行っておりますので、将来的には高齢人

口すら減少し、全体の人口が減っていくということです。近い将来、他の地域が行きつく先は、恐らく早川町と似たような状況になっていくのではないか、と推測可能であると言えるのではないかと思います。少々乱暴な言い方かもしれませんが以上となります。

灘上　ありがとうございました。先ほど田野岡上人からも、行政に対して、色々な手続きの簡略化や、倒壊の危険性がある寺院、無住になった寺院の今後の対応について等、問題提起がございました。今後宗門が取るべき対応について中條先生よりご提案頂ければと思います。

中條　この質問に関しては、現場の田野岡先生、山本先生から伺った方がいいのではないかと思います。田野岡上人からもお話がございましたけれども、これから教師が少数化していくことが予測されるので、少ない人数のお上人方であっても、多くのお寺を支えることができるようなシステムを作っていかなければいけないと、私はいろいろなところで申し上げております。例えば、先ほど田野岡先生が言われたように、代務住職の更新手続きを、もう少し負担を軽くしてほしいということも、具体的には必要かと思います。

また、お上人が誰一人いなくなってしまうという事態は避けなければいけないと思いますので、やはり後継者を確保しておくということ。あるいは、もしかしたら外の地域から来ていただく場合もあるのかもしれませんが、後継者の確保は必要ではないかと思います。特にこの二点が、今回の調査から、私が強く感じたところであります。

灘上　ありがとうございます。田野岡上人と山本上人は、本日の中條先生と井出先生のお話をお聞きになって、現状の法務や布教をする中で、何か聞いてみたいことや疑問に思うことはございますか。

田野岡　そうですね。先ほど、樹木葬のお話が出ておりましたが、恐らく一関市の知勝院は日本で最初に樹木葬を始めたお寺ではなかったかなと思うのですが、もしそうだとすれば、最初はすごいお金を必要としたと思います。いまの樹木葬は、先ほど井出先生も仰っていたように、そんなもので樹木葬と言えるのかというような樹木葬が、安い値段でできるようになってきておりますけれど、あそこは本格的に山を変えていく、里山を随分変えていくというような形でやっておりました。ですので、最初のうちは東京の人が随分行ったようです。つまり、お金持ちがうわっと集まったというようなことを聞いておりますので、なかなか一般論的には難しいかなと思います。三次市でも、他宗派の方で樹木葬をなさっているところがあることはありますが、うちの檀家さんの中で評判がどれほどかと思うと、皆さん山の中に住んでいるからということもあるかと思うのですが、樹木葬を利用したいという意識はあまりないように思います。

いま、住職している光善寺というお寺には、一応永代供養墓を数年前にこしらえました。予約をするからねという方はいらっしゃいますが、都会のように、あっという間にいっぱいになったということは全くもってありません。

灘上　ありがとうございました。山本上人は、何かご質問などございますか。

山本　先ほどから話に出ている通り、代務住職の三年に一度の更新手続きの簡略化を希望します。また、自分の寺院は息子がいるからいいのですが、他の早川町の寺院の場合、やはり存続が難しい寺院が幾つかあります。そのような場合に、宗門の行政がもう少し介入して、地元の住職と話をしながら何とかする方法を考えていかないと、かなりの数の寺院が本当に消滅していくのではないかという危惧があります。

灘上　ありがとうございます。山本上人からは寺院の後継者について、田野岡上人からは代務申請の負担や後継者問題など、それらのことが次の世代にはより深刻になっていくというお話がございました。田野岡上人、山本上人も過疎地域で出家され、ご住職になられたとのことですが、そのきっかけや、ご自身の後継者についてお話しいただければと思います。

田野岡　私は在家出身なのですが、祖父は戦前に日蓮宗の教師の資格を持っておりました。祖父は晩年に、私は坊主として死にたいからということで、同じ広島県の山の中のお寺一軒の住職になりました。私はその影響で立正大学へ進むということになり、祖父の関連でこの三次市の法音寺というお寺の住職になった次第です。

将来については、私ら年寄りには分からないことで、今の二〇代の人と話をしていると考え方が全然違いますので、やはり若い住職に対応していただきたいと思います。無責任ですが、はっきり申し上げると、どうなっていくのかは分かりません。これから若い人にどのように話をしていったらいいのか、答えはなかなかないと思います。

灘上　ありがとうございます。山本上人はいかがでしょうか。

山本　私の場合は師父が、いま代務している早川町のお寺から、現在本務しているお寺へ移りました。本務しているお寺も、檀家が三〇軒足らずで、車も入れない山の中にあったのですが、それを切り開いてお寺も全部新しくしました。やはり、その背中を見て育ったものですから、自分も兄弟男一人だけでしたので、自分も坊主にならなきゃいけないなという思いで僧侶になった次第です。

師父はもう遷化していましたが、自分の息子も、息子からすれば祖父の背中を見て育っていましたので、自分もお

坊さんにならなければいけないということで、大学生の途中から進路を変えました。どうしたらお坊さんになれるのかを自分で全部考えて、普通の大学を辞めた上で、立正大学へ入り、池上本門寺に随身として入って、お坊さんになった、そういう次第でございます。今後のことについては、正直どうなるか分かりません。ただ本当に、一日一日、その場その場で一生懸命頑張ってやっていくだけだと思います。以上です。

灘上　ありがとうございます。これは過疎地域のお寺に限らず、全寺院に当てはまる後継の問題です。当然都会でも、後継者がいないお寺もありますので、今の皆さんの思い、それから次の世代へ伝えていく思いというものも、われわれが共通の認識を持たなければならないと思います。そして、寺族内での後継者育成のあり方についても日々考えていかなければいけないと思います。

本日、井出先生から、過疎問題とは地域が人をつなぎ止める求心力を失ってしまったことが根本にあるのではないかというお話がありました。世代間の地域継承の問題といえるとも思いますし、さらにはこの日本という国における支配的な考え方や倫理、そして日本人が今後、何を大切にし、何を尊重してどういう生き方をしていくのか、という価値観の問題でもあると言えます。

今後、過疎地域はどのようになってゆくのか、実際にお住まいになっている田野岡上人はどのようにお考えでしょうか。

田野岡　予測によれば隣の庄原市は、二～三〇年後には、市としての形はなくなるといわれていますので、少子化が本当に止められないようならば、三次市もなくなっていくのかと思います。もし少子化が止められれば、先ほどの講演にもございましたように、都市部から地方へぼちぼちと人が移っていくということは、ある程度期待しております

が、政治や官僚などの考えは、まだそこまでにはないと思いますので、なかなか私の目の黒いうちは無理だろうと思っております。

灘上　ありがとうございます。山本上人は、今後過疎地域はどうなっていくと思われますか。

山本　早川町の場合は、中條先生に調査していただいたように、お寺の行事、お墓参りなどに関しては、すごく思いがある方ばかりですので、当面の間は大丈夫と思います。しかし早川町自体、高齢者が五人だけとか、一人だけとか、三人だけとか、そのような限界集落ばかりですので、そこで住職が生活をするのは、絶対に無理です。いまあるお寺をいかに維持しながら、檀家さんのいるところへ住職が出向いて、いろいろと仏事をするという方法しかないかと思います。ただ、お墓が早川町にあり、法事はお寺で行うことを希望される方が増えてきているため、お寺だけはきれいにしようということで、どのお寺もきれいにしております。いま、五ヶ寺のうち一つは、先ほどの中條先生の調査報告にありましたとおり、つぶれた家屋がある集落の中にあります。そこは、他のお寺と合併する手続きを取っています。

灘上　ありがとうございます。田野岡上人、山本上人の現状をお話しいただきました。本日、井出先生にはいくつかのプランや事例をご紹介いただきました。お二方のお話を聞いて、なるべくハードルを下げ、今後のお寺の運営の仕方などご提案いただけますでしょうか。

井出　はい、ありがとうございます。私がお二人の先生に申し上げられることは全くないとは思うのですが、お二人

よりは少し下の世代からの観点であえて申し上げるならば、どんどん若者に譲っていくしかないのではないかと思います。これは仏教界だけではなく、いろいろな業界と関わる中で感じました。やはり未来の世代に早く責任を渡していくことは都市とか過疎地とかは関係なく、すごく大切な振る舞いではないかと思います。

私も四〇を超えてくる中で、すでに一〇～三〇代の若者たちの邪魔はしない人生を歩もうと決意しながら日々生活しています。若者たちの邪魔をしない。後継者の確保という問題はありますが、どんどん譲っていくということがとても必要ではないかと思います。また、全国を回っていて感じることは、いまは、住職が法を伝えていく立場でもありながら、経営も頑張らないといけない立場です。法を伝えることはすごく得意だが、経営することは苦手という方も、多くいらっしゃいます。では、なぜ経営を檀家さんや総代さんが担ってはいけないのだろうと思います。結局、現状のシステムではお寺は僧侶のものになってしまっています。根本的に、なぜ代表役員が僧侶でないといけないのかと思います。寺院が統廃合していけばいくほど、母体は大きくなるので、直感的には、住職とは別の方が経営管理をやっていった方がいいのではないかと私は思います。むしろ、僧侶は僧侶としての本業に集中できるような体制を取っていく。これは、先ほど法規の話も出ていましたが、そういうことを可能にしていかなければ難しいかと思います。

例えば、私は以前大学の経営にも携わっていたのですが、大学では理事長と学長というのが別におります。私立大学の場合、経営を全般的に見る理事長と、学問の長としての学長というのが別々なのです。この二党体制のガバナンスが機能している大学は元気があります。国立大学の場合は、国からお金が入ってくるので、学長が両方を兼ねているわけなのですが、国からの予算がストップした場合、その両方を兼ねる国立大学的な学長のあり方は、私は難しいと思っております。寺院も同様に、経営と布教の部分というのは、担当を分けていくことが必要ではないかと思います。実際にやるかは別にしても、法規上はそれを可能にしていくということを、システムとして整えていくべきでは

ないかと思っています。以上です。

灘上　ありがとうございます。現状と全く違う切り口のご提案でした。確かに我々僧侶は、自分ですべてやらなければならないという思い込みがあります。先ほど井出先生が仰ったホールディングス化のような、得意分野を生かせるシステムに変えていくというご提案も、今後参考にしなければいけないと考えます。

人口減少社会、少子高齢社会に突入した日本社会において、お寺の役割、意味を考える上で、両先生も仰ったように、この過疎問題が将来を先取りする縮図であると思います。そのため、我々はこの過疎問題を他人ごととは考えられない、考えるべきではないと思います。ディスカッションも後半となりましたので、この人口減少社会におけるお寺の役割をもう少し具体的に、人口減少社会だからこそお寺が必要なのだということをお話しいただければと思います。中條先生、この人口減少社会において、お寺がこうあればより良いのではないかというお考えはありますでしょうか。

中條　はい。これはむしろ井出先生に伺った方が、良いのではないかと思いますが、私が過疎地域をずっと調査している中で思うことは、過疎地の地域社会を見てみると、社会的結節点、すなわち人々が集まる場所というのが、徐々に減ってきているということです。例えば、公民館にしても行政の予算が回ってこないので、どんどん廃止されてしまったり、あるいは、そもそも人が住んでいないのでそうした集会所が閉鎖されるという傾向にあります。しかしながら、お寺はそのまま地域に残っておりますので、そうした社会的な機能、人々が集まる場所としての役割を担っていけると思います。早川町でも、山本上人が代務されていらっしゃるお寺のように、人々が自主的に集まってサロンを開いている。あるいは他の集落でも同じようなことをやっていましたが、そうした社会的結節点としての役割をお

寺が担っていけるのではないかと思います。

また、私は関係人口や人口動態というものも調査しておりますので、どうしてもそこに関心が向いてしまうのですが、報告の中でも繰り返し申し上げました通り、関係人口を結びつけることです。お寺には先祖祭祀の役割がありますので、他出子や他出者、例えば早川町や備北地域と縁を持たれている方々をお寺と結びつけることが必要だろうと思います。この二点のお寺の役割は、伝統的に続いてきたものであると思います。こうした点は改めて見直していいのではないかと思います。以上が私の過疎地域を見ていく中で考えていることになります。

灘上　ありがとうございます。では、井出先生。同じ質問となりますが、人口減少社会におけるお寺の役割についてお聞かせ下さい。

井出　そうですね。マクロで見たときに一概に言いづらいところはあると思っているのですが、私は死者の記憶を保全し続けることはとても大切だと思っております。国は生きている人しか扱わないわけです。死者というのは法的な人格が認められないので、国の制度では扱えないわけですが、亡くなられた方にも人格を認めて、長年にわたってその記憶を保存し続けることは、まさにお寺が長年にわたってやってきていることです。特に戒名などは象徴的だと思うのですが、それはずっとなくならないですし、むしろ、これからもぜひ頑張っていただきたいと思っています。

二点目は、先ほど中條先生も仰られましたけれども、やはり人々の結節点、集まる場というのはとても大切だと思っています。その点で、私は行政の公的なシステムに組み込まれていないということ自体が、とてもお寺の強みだと思っております。いまの社会は、何かと法律で管理する社会に向かっています。マイナンバーなどの、デジタル化がどんどん進んできている中で、逃げ場のない社会なっていきます。そのような中で、各地域によくよく見るとお寺と

いう存在がある、既存のシステムと離れたところに、逃げ場があるということは、私はとても重要だと思っております。それはまさに、駆け込み寺であると思っているのですが、そういうものができる限り各地域にこれからも存在し続けてほしいなと思っています。

三点目は、存続という話については、ある種事業的な側面がつきまとうので、個々の寺院の状況に合った最適解を出していくしかないと思っております。私も、いろいろな寺院をご支援させていただく中で、あまり都市部とか過疎地とかは考えません。それを考えることに意味はないと思っております。それよりも、その地域における最適解は何なのかということをひたすら考え、とりあえずとにかくやってみるということ以外に正解はないと思います。あまり、都市部や過疎地というフレームで、いろいろな思考を停止させていくということ自体が生産的ではないなと感じております。宗派としての政策的な意味は当然あると思うのですが、ミクロな形で個々の寺院をサポートさせていただく身からすれば、あまり都市部や過疎地という切り口自体に意味はないと感じています。結局、最適解をどこまで追求できるかということでしかないと考えております。以上です。

灘上　ありがとうございます。本日、過疎問題を通して、自分たちが抱えている問題、そして将来抱えるであろう問題を考えましたが、いま井出先生が仰ったように、過疎も過密も関係なく、みんなが個別に最適解を見つけていくことが、我々にとって必要なことと思いました。

所長が最初に、「仏教は何をしてくれるのか、人々から期待していただくお寺を作ることが大切だ」と仰いました。やはり地域社会に寺院があることが、アジールとして大切であり、その地域の人々の安心感やコミュニティの連帯感に大きな影響を与えます。そして、私たちが地域において如何に行動すべきか、最適解を見つけなければいけない。それが我々にとっての、目標なのではないかと感じました。

寺院が地域に対して何を提供し、どのようにすれば必要とされる存在になるのか。各寺院そして我々僧侶が、取り巻く環境を踏まえながら、日々考えなければいけないと実感しました。寺院の中でも、先駆けて人口減少や少子高齢社会に直面している過疎地域の寺院は、今まさに極限の状況に立ち向かっています。そして、それは将来の寺院全体を映し出していると言えるのではないかと思います。宗門は、本日の田野岡上人と山本上人のお話を踏まえて、将来に生かし、ソフトランディングしていく方策を速やかに考え実行する時に来ていると実感した次第でございます。

ちょうど終了時間となりました。これにて、このディスカッションを閉じさせていただきたいと存じます。両先生、それから田野岡上人、山本上人、本日は誠にありがとうございました。